社会学概説　講義予定

【講義の目的と概要】

近代社会の成立が社会学の形成と関連していることを踏まえ、そこから発生してくる諸トピックについて、社会学の歴史と重ね合わせながら論じる。また、社会の歴史的変動が現代社会をどのようなものにしているか、現代社会がどのような問題を抱えているのかについて考察する。

【到達目標】

1．社会学が近代社会の対応物であることが理解されていること。
2．デュルケムが社会をとらえようとした方法について理解されていること。
3．個人・自己・行為・意味によって社会を捉えるウェーバー、ミードなどの理論について理解されていること。
4．社会をシステムとして捉えるパーソンズらの理論について理解されていること。
5．社会を構造として捉える諸理論について理解されていること。
6．階層・階級、文化、ジェンダーなどのトピックに関する社会学的視点が身についていること。
7．現代社会学が扱う諸テーマについて概観的な知識が身についていること。

【評価】定期試験100%。

1.　4/10　「社会」の発見　――社会学前史――

「社会」の語源を明らかにしながら、社会学がどのように成立したかについて解説する。まず、社会学が近代の産物であるということがどのようなことなのか、古代ギリシア、中世、18世紀の諸思想と対比する。次に、近代以降成立してきた社会思想について、（1）フーリエ、サン＝シモン、マルクスらの社会主義思想、（2）コント、スペンサーらの社会学、（3）デュルケムに影響を与えたモンテスキューとルソーについて概述する。

【キーワード】ポリス／『政治学』／統治／ファランステール／共産主義／社会有機体説／一般意志

2.　4/10　外在性としての社会　――デュルケム――

社会学の創始者として位置づけられるデュルケムの理論について解説する。（1）『社会分業論』における社会有機体説、（2）『自殺論』と『社会学的方法の基準』における社会学の確立、（3）『宗教生活の原初形態』における社会の生成をめぐる議論、（4）デュルケムを継承したモース、アルヴァクス、エルツらの議論。

【キーワード】機械的連帯・有機的連帯／社会的分業／外在性・拘束性／自殺の諸類型／アノミー／物のように／集合表象／個性の崇拝／前契約的契約／マナ／デュルケム学派

3.　4/17　意味と行為　――ウェーバー――

デュルケムとともに、近代社会学の確立に影響を与えたウェーバーの諸研究について概説する。（1）主観的意味と行為を基本とする方法的個人主義。（2）社会や行為の諸類型を理解するための方法論。（3）宗教と社会の関係の分析。（4）支配の分析。（5）近代の特徴。

【キーワード】理解／行為／理念型／エートス／『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』／カリスマ的支配／官僚制／合理化

4.　4/17　自我と無意識　――フロイトとミード――

自我が社会にどのように関わるのかについて代表的な議論であるフロイトとミードについて概説する。（1）フロイトにおける無意識、（2）フロイトにおける超自我と自我、（3）ミードにおける自我の出現の理論。

【キーワード】無意識／欲望／エス／主我・客我／重要な他者／一般化された他者

5. 4/24　形式と相互作用　――ジンメル・シカゴ学派・相互作用論――

社会を相互作用からなるものとして捉えたゲオルグ・ジンメルの社会学と、ジンメルおよびミードに影響を受けたアメリカのシカゴ学派の社会学について概観し、1960年代の相互作用論との関連について述べる。なお、ブルーマーが提唱した相互作用論（主義）については、内容の関係上次回述べる。

【キーワード】社会化の形式／シンボル／自我／シカゴ学派／状況の定義／相互作用／準拠集団／ラベリング／グラウンデッド・セオリー

6. 4/24　システムと機能　――パーソンズとマートン――

1950年代にデュルケムやウェーバーらに依拠しながら、システムとして社会を捉えようとしたパーソンズの理論について解説する。次いで、同時期に、社会を機能として捉える視点を提供したマートンらの機能主義について説明する。

【キーワード】ホッブズ問題／パタン変数／AGIL図式／シンボリック・メディア／順機能・逆機能／顕在機能・潜在機能／中範囲の理論／予言の自己成就

7. 5/1　日常世界の構成と解体　――批判社会学と現象学的社会学――

1960年代にシステム論的な捉え方に対する登場した批判社会学および相互作用論、相互作用論を推し進めて社会秩序のあり方を分析したゴッフマンを紹介したのち、現象学の視点から社会の成り立ちを明らかにしようとするシュッツ、シュッツの視点に立ちマルクス、デュルケム、ウェーバーを統合したバーガー＆ルックマン、社会批判として現象学を用いて社会秩序を実験的に解体させてみせたガーフィンケルの議論を紹介する。

【キーワード】誇大理論／反省社会学／シンボリック相互作用／自己呈示・印象操作／視界の相互性／レリバンス／多元的現実／現実の構築／エスノメソドロジー／ブリーチング実験／ドキュメンタリー的解釈法

8. 5/1　葛藤と闘争としての社会　――新マルクス主義と階級理論――

資本主義社会を階級構造から捉えたマルクスの視点を発展させるとともに、20世紀の産業社会における階級構造の変化を明らかにした新マルクス主義をはじめとする階級研究を解説する。ドイツのダーレンドルフ、アメリカのミルズとライト、イギリスのギデンズらであるが、ウェーバーの身分集団論から資格社会を論じたコリンズについても述べる。

【キーワード】生産手段／階級闘争／社会移動／ホワイト・カラー／新中間階級／所有と経営の分離／身分集団／資格社会

9. 5/8　家族と性の社会学　――フェミニズムとジェンダー・スタディーズ――

19世紀のメアリ・ウルストンクラーフトに始まる女性解放の思想は、男性中心社会の告発であった。女性が「第二の性」へと貶められるあり方を、フロイト理論を用いながら分析したボーヴォワールの思想は、1960年代後半アメリカでフェミニズムとして爆発的に展開した。男性支配のあり方を家父長制や母性イデオロギーなどの概念から明らかにしながら、大々的な社会運動にもなった。しかし、フェミニズムにはある弱点が潜んでおり、1980年代以降は大きく変質せざるを得なかった。このようなフェミニズムの思想と運動を概説しながら、ジェンダー研究以降の展開との関連について述べる。

【キーワード】第二の性／ウーマン・リブ／ラディカル・フェミニズム／家父長制／母性イデオロギー／ロマンティック・ラヴ／マルクス主義フェミニズム／性差極小論・性差極大論／ジェンダー／ジェンダー・トラブル／ホモフォビア／ゲイ・スタディーズ／クィア・スタディーズ

10. 5/8　文化の社会学　――批判理論、ブルデュー、カルチュラル・スタディーズ――

まず、近代社会において発展を遂げてきた文化産業や大衆文化を批判したアドルノとホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』などについて解説し、文化の持つ正統化と再生産の作用を分析したブルデューの研究を概観する。これらに対して、大衆文化をより中立的な立場で分析しようとするレイモンド・ウィリアムズ以降のイギリスの研究、特にカルチュラル・スタディーズを取り上げて概説する。

【キーワード】フランクフルト学派／文化産業／再生産／労働者文化／感情構造／解読の三つの類型

11. 5/15　大衆社会と消費社会

まず20世紀初めに成立した大衆社会とはどのようなものであったかを解説する。大衆社会は、20世紀後半に消費社会へと変貌する。そこでは消費とは使用とは別の内容を有するようになっていた。このことについて、消費を経済学的・人類学的な捉え方を紹介しつつ、記号としての消費という考え方を打ち出したボードリヤールの議論について述べ、現在、どのような方向に進んでいるのかについて議論を紹介する。また、関連して遊びの社会学についても紹介する。

【キーワード】群衆・公衆・大衆／他者志向型／社会的性格／脱産業社会論／誇示的消費／ポトラッチ／呪われた部分／記号としてのモノ／ポスト・フォーディズム／遊び

12. 5/15　マスコミュニケーションとインターネットの理論

20世紀に飛躍的な発達を遂げたマスコミュニケーションをどのように捉えるかについて、諸研究を概説する。特に、マスメディアが政治と強い結びつきをもちながら発展してきたことを述べ、テレビの普及以降の疑似現実との関係、インターネット普及後の影響力について、諸理論を紹介する。

【キーワード】疑似環境／説得研究／疑似イベント／メディアはメッセージである／スペクタクル／シミュレーション／スマートモブズ／サイバーカスケード／アーキテクチャー

13. 5/22　システムかコミュニケーションか、モダンかポストモダンか

システムによる生活世界の植民地化の批判からコミュニケーション的行為を構築するに至ったハーバーマスの議論と、サイバネティック・システムに発想を得つつ独自のシステム理論を展開したルーマンの議論を紹介し、両者の対立点について述べる。また、ハーバーマスに代表されるような現代社会をモダンとみる立場と、リオタールに代表されるポストモダンとみる立場との対立についても述べ、フーコーの研究についても紹介する。

【キーワード】公共性の構造転換／生活世界の植民地化／コミュニケーション的行為／理想的発話状況／オートポイエーシス／複雑性の縮減況大きな物語の失墜／未完のプロジェクト／後期近代・ハイモダニティ／再帰的近代／リキッド・モダニティ／パノプティコン／管理社会・監視社会／権力／生政治

14. 5/2　解体する「社会」と新たな社会学

社会学はもともと一国の社会の研究として構想されたものであった。しかし、20世紀半ば以降移民の増加と経済のグローバル化によって、社会学の対象は、創始者が夢見たような純粋なものではなくなってしまった。この現代の世界システムにおいて、社会学はどうありうるのかについて考察する。また、このような社会をどのように捉えるのか、最先端の視点を紹介する。

【キーワード】世界システム／グローバリゼーション／脱領土化／ノマド／社会を越える社会／ANT

（進度により12回以降の内容の変更があります）

【講義で言及する主な著作】
○アリストテレス『政治学』岩波書店（岩波文庫）
○ジャン＝ジャック・ルソー『社会契約論　ジュネーブ草稿』光文社（光文社古典文庫）
○アレクシス・ド・トックヴィル『アメリカのデモクラシー』岩波書店（岩波文庫）他
○エミール・デュルケム『社会分業論』講談社（講談社学術文庫）
○同『自殺論』中央公論社（中公文庫）
○同『社会学的方法の規準』岩波書店（岩波文庫）
○同『宗教生活の原初形態　上・下』岩波書店（岩波文庫）
○マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店（岩波文庫）
○同『社会学の基礎概念』岩波書店（岩波文庫）
○同『支配の社会学』講談社（講談社学術文庫）
○ジグムント・フロイト『自我論集』筑摩書房（ちくま学芸文庫）
○ジョージ・ハーバート・ミード『精神・自我・社会』青木書店
○ゲオルグ・ジンメル『社会学　上・下』白水社
○W・I・トーマス＆F・ズナニエツキ『生活史の社会学』御茶の水書房
○タルコット・パーソンズ『社会体系論』青木書店
○R・K・マートン『社会理論と社会構造』みすず書房
○アルフレッド・シュッツ『社会的現実の問題　Ⅰ』マルジュ社
○P・L・バーガー＆T・ルックマン『現実の社会的構成』新曜社
○アーヴィン・ゴッフマン『行為と演技』誠信書房
○ハロルド・ガーフィンケル他『エスノメソドロジー』せりか書房
○ラルフ・ダーレンドルフ『産業社会における階級および階級闘争』ダイヤモンド社
○C・ライト・ミルズ『ホワイト・カラー』東京創元社
○アンソニー・ギデンズ『先進社会の階級構造』みすず書房
○ケイト・ミレット『性の政治学』ドメス出版
○ナンシー・チョドロウ『母親業の再生産』新曜社
○M・ホルクハイマー＆Th・W・アドルノ『啓蒙の弁証法』岩波書店（岩波文庫）
○ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン　Ⅰ・Ⅱ』藤原書店
○レイモンド・ウィリアムズ『長い革命』ミネルヴァ書房
○グレアム・ターナー『カルチュラル・スタディーズ入門』作品社
○ニクラス・ルーマン『社会システムのメタ理論』新泉社
○ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』未来社
○同『コミュニケイション行為の理論　上・中・下』未來社
○マーシャル・マクルーハン『メディア論』みすず書房
○ギイ・ドゥ・ボール『スペクタクルの社会』筑摩書房（ちくま学芸文庫）
○フリードリヒ・キットラー『グラモフォン・フィルム・タイプライター　上・下』筑摩書房（ちくま学芸文庫）
○ロラン・バルト『神話作用』現代思潮新社
○ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店
○ミシェル・フーコー『監獄の誕生』新潮社
○同『性の歴史　1　知への意志』新潮社
○ジャン＝フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件』水声社
○ユルゲン・ハーバーマス『近代　未完のプロジェクト』岩波書店（岩波現代文庫）
○アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か』而立書房
○ジグムント・バウマン『リキッド・モダニティ』大月書店
○ウォーラーステイン『近代世界システム』岩波書店
○ローランド・ロバートソン『グローバリゼーション』東京大学出版会
○ブリュノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す』法政大学出版会